

ない様に心掛けるつもりだ。最後にハンドボール部はチームプレーであるから、部員一人一人の好きかかってな行動言動を育てては勝利は有り得ないということを言って、この文の語句としていた。

反感



西本 由治

私は高校時代に何か一つのクラブ活動に打ち込もうと決心した。元来、私は腕を強くしたかったが、手でボールを扱うハンドボールに決めた。そんなささやかな目的でハンドボールをすることにした。が、今から考えるとそれは、全くかけ離れた夢であった。

そう、一年の夏の合宿の時、私はあんまり二年生にこき使われるので、合宿後の練習は一度も行かなかった。食事の用意、後かたづけ、ボールの手入れ、室のそうじ、その他色々の用をさされた。私は家においても、どこにおいても、一度だって人に使われた事がなかった。だからよけいに腹が立ってしかたがなかった。合宿だから一年も二年もお互いに苦しい。二年は一年生の時一度経験したから、二年生が何でもしてくれてもよさそうなものだ。毎日く、し

んどのいからみんな動くことがおっくうがちなのに、二年生は帰ながら一年生にあせいで、こうせいといつていいつけるばかりで、自分たちは少しも動こうとしなない。だから一年生はよってたかって文句ばかりいたいた。いつもそんな事になると、私が一番先に感情を爆発させて、二年生にたてついた者だった。そんな文句があるのならば自分でしろ。

いつだったか、こんな事も考えた。一年生だけで高津ハンドボール第二軍を作ろうと。ギーパー、バツク、ホワードも一年生だけでできるのだ。そして今の二年生の奴らどんな顔しよるやろ。そうか、二年生の奴らおいだしてしまおう。(まだそれは晩秋の時であつたが)一年生だけでクラブをやつてゆこう。こんなバカな事も腹いせに考えたものだった。しかし、二年生になつて考えてみると、それらが二年生にとって一番苦痛な事があることがわかった。又、クラブ内の封建制はあたり前だと、そうでないとは統せいとれないし、今のサラリーマン社会の現実もそうであることだし、皆が平等であるとはボールの手入れとか部屋の様子などだれもしない。だから一年生は、昔の剣の修業のように、かまたぎ、マキ割り、口ウカふきをするが如きに、クラ

プの身のまわりからしなければならぬ。又、それが現実になつてしまつてゐる。あつた二年生にたつた私でも、いざ二年になるとこんな考えまで変つてしまつた。時の流れは偉大なものだ。ハンドボールは私を、家という井戸から、大海である現実社会に視野を發展させてくれた。もし、ハンドボールをやらなかつたら現実を知らないうちに高校時代を過ごしただらう。だから、今の一年生も早くこの事に気がついてほしい。今の一年生は、このまうな事をいふと失礼だが、少しけがしたからといって練習を休み、少し練習がきついたらといて休ましてくると。もう少し、と根拠をいふ出してもらいたい。私たちの一年生の時は、たゞ先輩にもんくいつていただけで、あんまり練習のきつさについて文句をいひなかつた。しかし現実にはだん／＼民主化して来たから、一年生の言う事も一理はあるが。それから、今一つ問題になつてゐるのは、クラブと学校行事についてだが。クラブのために選手として出場するのは結構だが、クラブのある時はクラブをしてもほしい。運動クラブのやつてゐる者は、毎日練習してゐるから、クラブ活動のやつてゐない人達に、たまに運動させてやつたらどうや。クラブ活動をやつてゐる者が、ゆずりの

気持をもてるならと小程美しい事かノ関係無いかもしれぬが。あんまり偉そうな事はかり言ふが。しかし、現在私は、クラブ活動がどれ程おもしろいものか、特に、ハンドボールクラブは先輩があつてよりやりにくいものか。私は現在の主将である鈴木栄太郎君に激励の言葉を託したい。

一年生

誇

りとは二

—五二—

一年代表

ハンドボール部に入り最初に感じたことは、部員は少ないが、その少ないもの同志はお互いに「俺達はハンドボール部員である」という誇りを持つてゐることである。もちろん、バスケットやその他のクラブ員も各々誇りを持つてゐるだらう。しかし、そニが伝統というのか特に強い印象を受けた。三年生が引退してからは、急に練習が身体に強くなつた。急になつた。合宿以降、夏休みの練習、二学期になつてからおよそ一ヶ月半の基礎練習、休みみたい。」「さぼりたい。」「やめた。」「このような気持を何回持ったかわからない。しかし、もう十一月「やめた。」「と」という気持は持つていても、心の底